

御堀の松籟^{しょうらい}心地よく、三日月掛かる秋の空、石川、小泉、上西
に、一年ぶりに招かれて、同窓会をやるべえと、三十六年卒業の、
ずいと乗り込む銀座ライオン、ビアガーデン、大手町の真ん中で石
川ならぬ神田川、幹事の談合^{だんごう}掛け合い人は、ぐっと飲み込む慈姑^{くわい}な
り。

心持よくうかうかと、浮かれ^{からす}鴉^{みちのく}のただ一羽、遠い陸奥思い出し、
ふと思い立つ戯言^{ざれごと}は、仙台訛りの片言混じり、戯作^{げさく}気取りにご挨拶。

ひつじどし しもつき 未年の霜月半ばの十と六日、うま 午の時刻をたがわずに、とういなんばん 東夷南蛮

ほくてきせいじゅうてんちけんこんつつうらうら しばらく 北狄西戎天地乾坤津々浦々、「暫く、しばらく」の声かけあって、

男の花道颯爽^{さつそう}と、馳^はせくる同期の健児その数は、十に余る十有五人、

まずは生き抜いてこそ、男の冥利^{みょうり}。元気の秘訣は、さんどうらく ぼんのう 三道楽、煩惱則

ぼだい 菩提とは、はて、げせわ 下世話に語るすべもなし。開宴記念^{そろい}の揃いの写真。

えんまちよう じょうはり 闇魔庁の浄玻璃の鏡に映す我が姿、たかれ 誰そ彼はとは聞こえぬぞ。人生

たそがれ 黄^{たそがれ}昏迫る歳月に、くしみし皺^{しわ}と白髪^{しらが}は名誉のしるし。

開宴挨拶そこそこに、乾いたのどに流し込む^{びーる}麦酒に、日本酒、ウ

イスキー、酒の肴^{さかな}は話の彩^{いろどり}。卒業以来五十四年、土曜の授業は

休講で、水曜日は自主半ドン、カイロ落ち、ナセルの心今ぞ知る、

よみびと うなずいて 詠み人知らずに頷いて、百分授業は休憩時間、寝言^{ねごと}歯^{いびき}ざしり 鼾は

ごはつと
ご法度。思い出多い名講義、ダルマストーブの講義室、午後の授業
は映画館、ヘップバーンに吉永小百合、アランドロンに裕次郎、思
い出多い名画座や銀映は遠い昔の物語り。

西の平の夕焼け小焼け、^{すすき}芒が原の赤とんぼ。桜の^{み か みね}三神峯花より
団子、夏の松島海坊主、紅葉の^{さくなみ}作並芋煮会、冬の蔵王で雪だるま、
四季折々を楽しんで、ボートの^{れんしゅうていざんぼり}練習貞山堀、^{ひょうじょうかわら}評定河原の定期戦、
テニスの試合は宮城野原、暗くなるまでボールを追いかけて、行き着
く先はゼロ番丁、準備の時間を待ちかねて、毎度お世話のコップ酒、
追われてきたのはいつの日か。勝っても負けてもまず乾杯、酒の
^{さかな ほ や}肴は海鞘に笹かま、^{いわし}鰯の頭も信心から、そして今宵も^{とんなんしいべいはく}東南西北白
^{はつちゅん}発中。やはり今夜も終電間に合わず。手違い間違い勘違い、青春
時代は気が狂う、恋の手習いつい見習いて、恋のいろはにほの字を
書いて、それで浮名は散りぬるを、しがねえ恋は情けが^{あだ}仇、恋と食
い気を比ぶれば、恥ずかしながらひもじさ^{まさり}勝利、^{おしや かさま}お釈迦様でも気が
付くめえ。

卒業研究は骨休め、^{しごと わけ}実験の理由もわからずに、ただしごかれて、
何のためやらいまだに不明。思い出話はほろ苦い。竹に雀や^{だて}伊達
^{もよう}模様、七夕飾りや大学祭、^{らいらいきょう}磊々峡の散歩道、青春時代は^{まんげきょう}万華鏡。

今日は見えない同窓生、今頃どこでどうしているのやら、人の噂に
戸は立てられず、遠慮会釈^{えんりよえしゃく}の有らばこそ、身の行く末は気掛かりな
れど、辛気^{しんき}な話は捨て衣^{すてごろも}、いずこも同じ秋の夕暮、金が物言うこの
憂^うき世^よ、鏡に恨みは数々ござる、無限の鏡やら手水鉢^{ちょうずばち}も叩いてみた
いは人の常、栄華^{えいが}は邯鄲^{かんたん}夢枕^{ゆめまくら}、奢^{おごる}る平家は波枕^{なみまくら}、色即是空^{しきそくぜくう}
空即是色^{くうそくぜしき}、盛者^{じょうしゃ}必滅^{ひつめつ}会者^{えしゃ}定離^{じょうり}、頑張れ三六卒業生。

まずは本日これきりと、千秋万歳^{せんしゅうばんざい}目出度^{めでたく}くお開きと、本に今宵
は、思い出一杯腹一杯、麦酒も程よく身に回り、酒手^{さかて}をはずんで勘
定済まし、財布の底^{ありがね}の有金は、次回の葉書代には足りようか、喜寿^{きじゅ}
の祝いは名目で、またの逢う日を楽しみに、胸いっぱい思い出を、
こいつあ今年も縁起^{えんぎ}がいいわえ。

平成27年11月16日、

昭和36年通信工学科卒業 同窓会を記念して